

研究グループ発足にあたって 個人的経験の一般化に向けて

大城直樹(明治大学)

日本地理学会秋季学術大会@福島大学
大衆文化の地理学研究グループ: 第1回集会

報告者の大衆文化への関心

↑
「街歩き」の「詩学poetics」から

- 「詩学」とは、修辞や文彩、換言すると「文の仕組み／仕掛け」に注意を向けること
- 街歩きの仕組みの解説
- 街歩きのコンテキストを構成する、その時代性と場所性に配慮しつつ考えるべき

そもそも、歩くところのその街をどう解すべきか？

- 都市／街を歩くということは、必然的に「大衆文化」に接する(触覚・視覚・嗅覚・味覚・聴覚的に)ということ
- 都市が「大衆文化」を作り、かつ「大衆文化」が都市／街をつくる
- 相互作用的、相互構築のプロセスとして都市／街を考えること

報告者の目下の視角

■ ヴァーチャリティとタンジブルな世界の関係性の変容

- 1) 19世紀後半から1920年代・30年代の、いわゆる「ショック体験」における身体性(空間性との関わりのあり方)の変容
→ 『モダンタイムズ』や『メトロポリス』のような「経験の衰退」・・・蒸気機関、テラー主義、フォーディズム
- 2) 20世紀末から21世紀初頭のIT化とヴァーチャリティの浸透に伴う身体性(空間性との関わりのあり方)の変容(?)
→ タンジブル(触知可能)な世界からの退避?
face to face 的コミュニケーションより、ネットのコミュニティが「居心地の良い」、一義的な自己準拠枠組となる(だが容易にそれは反転する)
→ 新たな「経験の衰退」の時期なのか？

* 両者の比較から見えることは何か？

→ 新技術に媒介された文化的経験によるアウラの崩壊と経験の衰退(ペンヤミン)とでもいうべきもの？

- 現にSNSや、2ちゃんの世界が引き起こす様々な事件から、ヴァーチャルな自己準拠枠組による世界が、タンジブルな世界と同時並行的に共=現前していることを我々は目撃している
- 昔風にいう「パラレルワールド」の現実化なのだろうか？
- タンジブルな世界とのディスコミュニケーション？
- これらは、IT技術の進展によって加速的に可能になったということが出来る

- 単なる思春期(あるいは日本社会)固有の「お友達世界」の一義化というものとは区別すべきか？(被っている事もまた確か)
- 単なる「世間知らず」なのか？
- 高度なICT技術の実現によって可能になった時限もあるはず
- 例えば、「第四空間(ヴァーチャルな空間や匿名メディア、ストリート)」
- → 「感情的安全」を保障する場／空間
- 家(第一空間)、学校(第二空間)、地域(第三空間)ではもはや担保できない
- 宮台真司: 主として郊外住宅に居住する学校生徒を対象とした考察 [MIYADAI.com Blog: (<http://miyadai.com/index.php?itemid=151>)より]

- いったん追いつめられると・・・
- → もはや物理的隔離によっては逃げることは出来ない
- 仮に家にいたとしても、携帯やPCから離れることが出来ないから
- 「つながっていること」の一義性
- 以上、これは飽く迄、街に生きる人々(特に若者)の現在の形態(生態?)をどう理解すべきかという問題

- 別の例:これはヴァーチャルとタンジブルとの話ではないが・・・
- 目の前の「リアル」を本気化できない事態というのも問題となっている
- → 大阪2児遺棄事件:南堀江(2010年7月)
- → どうしてあの場で起こったのか?
- 南堀江=現在では「若者の街」化
- もともとは木材関係(堀に運ばれる)
- 家具や仏壇
- 1990年代初頭の段階では「若者化」していなかった

- だが2000年代頃から「若者化」進展
- 飲食店より、衣服、雑貨系
- 当然地代も上がる
- 一種のジェントリフィケーションも起こる
- 古い町屋が潰され賃貸マンションに立て替わっていく部分も
- まさにそこで、この事件は起こった
- なぜ彼女はここに住んだのか?
- 安くはない賃料、育児費も当然かかるのに...
- 隣にいるのに「誰も知らない」世界?
- 寄る辺なき空間

アノミーといえばアノミーか？

- 「寄る辺なき空間」化(1990年代前半以降)
- 2008年6月8日:秋葉原事件(加藤智大被告)
- 6月17日宮崎勉被告(東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件:1989年)死刑
- 「この国では若い世代にしか分からないリアリティがあるのにそれが社会や政治の言葉に翻訳されず、いつまでたっても「おまえら大人になれ」ということばかりが言われ続けている、その状況に対する不満がとても大きいんです」(東:2008, p.207)

少し視点を戻すと・・・

- 人間の、身体を越えた(ポストヒューマンな)マテリアルなものとの混淆状況は、これまでも多く描かれてきた
- 分かりやすい例として、サイボーグ
- ブレードランナー → 攻殻機動隊
- 諸星大二郎「生物都市」(初出:週刊少年ジャンプ, 1974, no.31, 集英社)
- →居心地の良さ

- ・社会的コンテクストとしての「動物化」(東)する世界
- 「人間的なもの」→「スノッ的なもの」(コジェーヴ)→「動物的なもの」

- 「いまのこのポストモダン化し動物化した世界, あまり肩肘を張って大人になろうとか公的になろうとかするとむしろ鬱になるので, 適当にぬるぬる消費者をやって, 小さくハッピーに生きるべきではないか」(東:2008, p.301)
-
- → しかしそれさえ出来なくなっているのが現代社会...。社会の底が抜けたのか？

- 【参考文献】
- 東 浩紀『動物化するポストモダン:オタクから見た日本社会』講談社, 2001
- 大塚英志+東 浩紀『りあるのゆくえ:おたく／オタクはどう生きるか』講談社, 2008
- 吉原直樹「モダニティの両義性と「時間-空間」の機制」, 吉原直樹・斉藤日出治編『モダニティと空間の物語』東信堂, 2011
- 若林幹夫『<時と場>の変容:「サイバー都市」は存在するか?』NTT出版, 2010
- Jackson, P., Families and food: beyond the “cultural turn”, *Social Geography*, 6, 63-71, 2011